

「ハレルヤ・コーラス」に関する
言語学的 (Philological) 一考察 (後編)

松浦 義夫

第3章 「ハレルヤ・コーラス」の釈義的考察 続

- (2) The kingdom of this world
is become the kingdom of our Lord,
and of His Christ;

この箇所は、『ヨハネの黙示録』11章15節からの引用である。この箇所を釈義するにあたって、参考のために、ギリシア語原典その他必要と思われる諸訳を掲げると次のようになっている。

*Ἐγένετο ἡ βασιλεία τοῦ κόσμου,
τοῦ Κυρίου ἡμῶν,
καὶ Χριστοῦ αὐτοῦ,*

factum est regnum huius mundi
Domini nostri
et Christi eius

(ウルガタ訳)

Es sind die Reiche der Welt
unseres Herrn

und seines Christus geworden,

(マルチン・ルター訳)

הִנֵּה מַמְלַכֶּת הָעוֹלָם
הַיְיִתָּה לְאַדֹנֵינוּ
וְלִמְשִׁיחֵנוּ

hinneh mamlekheth hā-ōlam

hāyithah la-adoneinu

ve-li-meshihu

(フランツ・デリッチ訳)

a. The kingdom of this world

The Authorized Version においては The kingdom が The kingdoms と複数形となっていることはすでに指摘した。ウィリアム・ティンデル訳もジュネーブ訳もマルチン・ルター訳も複数形になっており、単数形になっているのはウルガタ訳と 그리스バハ校訂の本文以後のギリシア語原典のみである。

この箇所をそれぞれの訳で見ると、次のようになっている。

ἡ βασιλεία τοῦ κόσμου

(ギリシア語原典)

regnum huius mundi

(ウルガタ訳)

die Reiche der Welt

(マルチン・ルター訳)

mamleket hā-ōlam

(フランツ・デリッチ訳)

The kingdom は明らかにゲルマン語系であるのに対して、マルチン・ルター訳はラテン語系の die Reiche を使用していることは興味深い。ギリシア語の βασιλεία にせよラテン語の regnum にせよ、またドイツ語の Reiche にせよすべて既に reigneth に関する釈義の箇所において指摘したよ

うに、「王」と関連している。またヘブライ語の mamleket も m-l-k の三子音に由来する名詞であり、これも「王」と関連している。したがってこの The kingdom は「王国」とも訳せるし、「王であること」、「王としての支配」というようにも訳せる。ここでは、reigneth との関連で「王としての支配」と一応理解しておくことにする。ただし複数形の場合は「諸々の王国」という訳の方が自然であるが、複数形によって力強さとか充満とかを表現するセム語的用法と理解出来なくもない。しかしその場合も、「神」に言及する場合にあてはまることであって、「この世の王としての支配」に対するものとしてはやや不自然である。したがって、ここは単数形でありしかも具体的に存在する「王国」というよりも、「王としての支配」というように「抽象名詞」として受け取るほうが適していよう。

次に、of this world についてであるが、この this にあたる語句が存在する訳はウルガタ訳の場合だけであり、huius となっていることはすでに指摘した。ここで問題にするべきことは、of の用法についてである。英語訳以外ではこれに相当する表現を「属格」によって行っている。そうすると、この「属格」は、「所属」を示すのであろうか、そうすると「この世に所属する」という意味になる。「この世の王国」という訳はそのように理解した場合の訳ということになる。しかし、ここではむしろ「主格的属格」つまり行為の主体を示す用法として理解し、「この世が」という意味に受け取りたい。そうするとこの箇所 The kingdom of this world は、「この世の王としての支配」あるいは「この世が王として支配する状態」というように理解することができよう。

b. is become

The Authorized Version では are become となっているのは、前項の kingdoms との一致のためであることは言うまでもない。ウィリアム・ティンデル訳もジュネーブ訳もともに are となっており、時制は現在形である。しかしハレルヤ・コーラスの本文の場合も、The Authorized Version

の場合も現在完了形である。

この箇所をそれぞれの訳で見ると、次のようになっている。

ἐ γένητο

factum est

(ウルガタ訳)

Es sindgeworden

(マルチン・ルター訳)

hāyithah

(フランツ・デリッチ訳)

ギリシア語原典においては「アオリスト」が使用されている。あとはウルガタ訳もマルチン・ルター訳もフランツ・デリッチによるヘブライ語訳もすべて完了形となっている。つまり、reigneth の場合で見たのとちょうど同じようになっている。ハレルヤ・コーラスの本文の場合は、同じ「アオリスト」を reigneth と is become というように違う時制に訳し分けていることになる。ウィリアム・ティンデル訳やジュネーブ訳の場合は、「アオリスト」をこの場合も現在形に訳しているわけであるから、首尾一貫しているというように言えなくもない。そうすると、ハレルヤ・コーラスの本文がこのように時制を訳し分けているのは (The Authorized Version の場合も同様のことが言えるが)、それなりの理由が存在するのであろう。つまり、reigneth の場合には時に関係なく永遠の真理を表現するものとしての現在形であったものが、この箇所における is become の場合は、過去の状態から変化して現在の状態になっていることを表現しているものと理解できる。その過去の状態とは具体的には、「この世が王として支配する状態」のことである。

c. the kingdom of our Lord, and of His Christ;

この箇所をそれぞれの訳で見ると、次のようになっている。

τοῦ Κυρίου ἡμῶν
καὶ Χριστοῦ αὐτοῦ

Domini nostori et Christi eius (ウルガタ訳)

unseres Herrn und seines Christus (マルチン・ルター訳)

la-adoneinu ve-meshihu (フランツ・デリッチ訳)

この箇所において the kingdom を付加しているのは、ハレルヤ・コーラスの本文ともう一つ The Authorized Version のみである。もっとも単数と複数の違いのあることはすでに指摘しておいた。他の英語訳にせよ、上に引用したそれぞれの訳にせよ、やはり先ほどの「主格的属格」が使用されており、主体となるのは、「我らの主」と「彼のキリスト」ということになる。つまり「王としての支配」の主体が、「この世」から「我らの主と彼のキリスト」へと移行したということである。したがってこの箇所は「我らの主と彼のキリストが王として支配する状態」という意味に受け取ることができる。

以上のことを纏めると、

The kingdom of this world
is become the kingdom of our Lord,
and of His Christ;

は、次のように解釈することができよう。

この世の王としての支配は、
今や、我らの主と主のキリストの
王としての支配と成っているのである。

(3) and He shall reign for ever and ever.

この箇所は先ほどの箇所と同じく、『ヨハネの黙示録』11章15節からの引用である。この箇所を釈義するにあたって、参考のために、ギリシア語原典その他必要と思われる諸訳を掲げると、次のようになっている。

*καὶ βασιλεύσει εἰς τοὺς αἰῶνας
τῶν αἰώνων*

et regnabit in saecula saeculorum (ウルガタ訳)
und er wird regieren von Ewigkeit zu Ewigkeit.

(マルチン・ルター訳)

הוּא יִמְלֹךְ לְעוֹלָמֵי עוֹלָמִים :

ve-hu yimlokh le-ōlmei olāmim (フランツ・デリッチ訳)

この箇所で問題になるのは、Heは誰に対する代名詞であるか、ということである。これを「我らの主」に対する代名詞と受け取るか、「キリスト」と受け取るかによって、やや意味が異なってくるわけである。参考のために掲げた諸訳においても、ギリシア語原典はこの代名詞を欠いているし、ウルガタ訳も同様である。マルチン・ルター訳においては、erと男性単数主格の代名詞が使われているので、英語訳と同じである。

『ヨハネの黙示録』においては、「神」に対するのと同じ表現が、「キリスト」に対しても使用される場合がしばしば見受けられる。例えば、1章8節の主なる神の言葉「わたしはアルパであり、オメガである」は、17節のキリストの言葉「わたしは初めであり、終わりである」とは本質的に同じ表現である。つまり、『ヨハネの黙示録』においては、神とキリストとは一体となって「神」としての働きをしているわけである。そうすると、この

箇所においても He は「我らの主」と「キリスト」が一体となって「神」としての働きを行っているということであり、「神は」というように訳すことが出来よう。しかも、この「神」のうちには、すべての生命の源である「主なる神」と、その生命の仲介者であるところの「キリスト」が含まれているということになろう。キリスト教会において「三位一体論」という教義において定義されるようになった、キリスト教の「神論」つまり神という存在に対する概念の『新約聖書』における典拠を、この箇所も提供していることになる。また、ここで注目すべきことは、表面に現れている限りにおいては、「神」と「キリスト」であり、後にキリスト教会において「三位一体論」として定義される際の、「聖霊」は顕には描かれていないということである。この事情に注目して、これを敢えて表現するとすれば、「三位一体」というより、「父なる神」と「子なるキリスト」における「二位一体」としての「神」の働きが行われていることを表現していると受け止めることが出来よう。

a. He shall reign

この箇所の He に関しては、上で述べたわけである。次に shall reign についてであるが、ギリシア語原典の場合は βασιλεύσει と未来形、ウルガタ訳も regnabit と同じく未来形、マルチン・ルター訳も wird regieren と未来形になっている。フランツ・デリッチによるヘブライ語訳のみ yimlōkh と未完了形になっている。ヘブライ語の特徴として、注目すべきことは、動詞は時制によって区別されるのではなく、完了、未完了によって区別されるという点である。すなわち、ヘブライ語の完了形は、ギリシア語では概してアオリストとなり、未完了形は未完了過去、現在、未来などとなるわけである。したがって、ギリシア語原典は、この行為が未来において継続されることを表現したものであろう。またハレルヤ・コーラスの本文も、同様の理解に基づいて訳された表現であろう。ところでこの箇所でも、動詞 reign が使用されているが、このことについては再三考察してきたよう

に、ギリシア語原典もその他の諸訳もすべて「王」と関連する語句が使用されている。そうすると、この箇所は、「彼(神)は、王としての支配を継続されるであろう」というように解釈できよう。

b. for ever and ever

この箇所は、ギリシア語原典では *αιῶν* という語句を使ったイディオムが使用されている。この *αιῶν* という語句は、「世界」を時間的な面から見た表現であり、「時代」あるいは「世代」を示している。またこれからさらに展開されて、「永遠へと無限につながっている一連の時代の一つ」を示すために使用される。したがって、この箇所のギリシア語原典は、「永遠から永遠に至るまで」という意味に受け取れる。ウルガタ訳に使われている *saeculum* は、ギリシア語の直訳であり、同様に「時代」とか「世代」とかを表現するものである。また「世界」を時間的な面から見た表現であることも、ギリシア語と共通する。英語の *secular* という語句は、明らかにこのラテン語に由来する語句である。マルチン・ルター訳も、「永遠から永遠に至るまで」という意味である。ここで使用されている *Ewigkeit* も、ハレルヤ・コーラスに使用されている英語 *ever* も、ギリシア語 *αιῶν* やラテン語 *saeculum* との直接の関係は認めにくいであろう。ドイツ語の名詞 *Ewigkeit* と英語の名詞 *ever* が語源的に見て如何なる関連にあるのかは不明ではあるが、形態的には一見よく似た表現であることは確かである。

この箇所の考察の参考のために、重要な英語訳を見てみると次のようになっている。

in to worldis of worldis	(ウィクリフ訳)
for ever more	(ウィリアム・ティンデル訳)
for euermore	(ジュネーブ訳)
for euer and euer	(レームズ訳)

このことから理解できるように、ウィクリフ訳はラテン語の直訳であり、ever が初めて登場するのは、ウィリアム・ティンデル訳においてである。また ever が二つ並べられるのは、レームズ訳においてである。そうすると The Authorized Version における表現もハレルヤ・コーラスにおける表現も、ウィリアム・ティンデル訳及びレームズ訳を経たものであることが理解できる。ウィリアム・ティンデルが ever という訳語を使用したのは、マルチン・ルター訳に見られる形態的によく似たドイツ語の Ewigkeit にヒントを得たからではないかという推測も成り立つかもしれない。レームズ訳が ever を二つ並べたのは、もちろんウルガタ訳の影響であろう。いずれにせよ意味的には「永遠に」ということであろう。しかしこの語句に「世界」との関連を認めるのは、やや困難なように思われる。したがって「世々限り無く」という意味にとるよりも、「永遠から永遠に至るまで」という意味に受け取る方がよいように思われる。

以上のことを纏めると、

and He shall reign for ever and ever

は、次のように解釈することができよう。

そして神は永遠から永遠に至るまで
王として支配し続けられるであろう。

(4) King of Kings, and Lord of Lords.

この箇所は、『ヨハネの黙示録』19章16節からの引用である。この箇所を釈義するにあたって、参考のために、ギリシア語原典その他必要と思われる諸訳を掲げると次のようになっている。

Βασιλεὺς βασιλέων και Κύριος κυρίων.

rex regum et Dominus dominatum (ウルガタ訳)

König aller Könige und Herr aller Herren.

(マルチン・ルター訳)

מֶלֶךְ הַמְּלָכִים וְאֲדֹנֵי הָאֲדֹנִים:

melekh ha-mmlākhīm va-adonei hā-adonīm

(フランツ・デリッチ訳)

同じ名詞の単数と複数を of で結ぶ形式である。そうすると、King とは明らかにキリストあるいは神のことを示していると思われるので、Kings はキリストあるいは神が複数存在することになる。従って従来「諸王の王」あるいは「王たちのなかの王」というように訳されている場合は、キリストあるいは神は「王」のうちの一入である、というような解釈が成り立つことになる。しかしここで注意しなければならないのは、キリスト教の神も、それに先立つユダヤ教の神も、「唯一神」であるという大原則である。したがって、この場合も、複数形の表現も、神が複数存在することではなく、それとは別の何らかの事柄を表現していると考えべきであろう。Lord と Lords の関係も、同様のことが言えよう。ところで、フランツ・デリッチ訳からよく理解できるように、ヘブライ語では、名詞(単数)+冠詞+名詞(複数)と表現できるわけである。実はヘブライ語等のセム語においては、形容詞の最上級にあたる固有の形式が存在しないため、それに相当するような表現をする際に、このように単数の「斜格」と複数で表現するわけである。したがってそのギリシア語原典もそれからの翻訳である英語訳も、このようなヘブライ語的表現を逐語訳したものと考えることができよう。そうすると、形容詞の最上級にあたるような言葉を補って訳すと、

日本語らしくなるのではなかろうか。さらにギリシア語原典には冠詞が省略されているが、これは「呼格」の特徴であるゆえ、呼びかけの言葉と受け取られていると理解できよう。そうすると、「唯一絶対の王よ、唯一絶対の主よ！」と呼びかけていると理解することができよう。

以上のことを纏めると、

King of Kings, and Lord of Lords.

は、次のように解釈することができよう。

唯一絶対の王なる方よ、唯一絶対の主なる方よ！

以上「ハレルヤ・コーラス」の釈義的考察を行ったわけであるが、この結果を纏めると「ハレルヤ・コーラス」は、全体として次のように解釈することができよう。

汝ら神を讃美せよ。

なぜなら、総べてを支配する力のある方、主なる神は、
王としての支配を確立されているのだから。

この世の王としての支配は、
今や、我らの主と主のキリストの
王としての支配と成っているのである。

そして神は永遠から永遠に至るまで
王として支配し続けられるであろう。

唯一絶対の王なる方よ、唯一絶対の主なる方よ！

汝ら神を讃美せよ。

第4章 結 論

以上様々な角度から、「ハレルヤ・コーラス」の本文を考察してきたわけであるが、その中に一貫して表現されているのは、「神による王としての支配」ということになるだろう。そしてこの「王としての支配」が、現在形、現在完了形、未来形という様々な時制で表現されており、キリストの誕生と十字架さらに復活という出来事によって、神の王としての支配が現在において確立され、永遠に至るまでこの支配が続くことを讃美しているわけである。ところで、この「神による王としての支配」が実現するのは、神学的には「終末時」のことであるのだが、いわばその終末を先取りした型になっているわけである。『ヨハネ文書』の神学的特徴の一つとしていわれていることは、この終末の先取りということであり、これを「実現された終末論」(realized eschatology)というように呼んでいるわけである。「ハレルヤ・コーラス」の本文は、ギリシア語原典における「アオリスト」を現在形と現在完了形に訳しているわけであるが、この「アオリスト」という時制は、まれな例外を除いて一般的には、過去の事柄を表現するために使用されるものであり、「現在」のことを表現するための用法は、そのまれな例外に属すわけである。したがって「ハレルヤ・コーラス」の本文は、まさに「現在」に強調点が置かれているということがわかる。そしてその「王としての支配」を、動詞 *reign* と名詞 *kingdom* によって表現しているわけである。*reign* は語源的にはラテン語系に属し、*kingdom* の方は語源的にはゲルマン語系に属すわけであるから、この点においても表現の多様性が認められる。すなわち、「ハレルヤ・コーラス」の本文は、「神による王としての支配」がまさに「現在」において確立されていることを、英語の特徴を生かして、できる限り多様な角度から表現したもの、というように理解することができよう。

参考文献 (前編の参考文献の他)

Burton, E.D. *Syntax of Moods and Tenses in New Testament Greek*.
Edinburgh: T & T Clark Ltd., 1987.